

# 「古代学」としての考古学・「神道史」としての考古学

— 大場磐雄の子持勾玉論をめぐって —

中村耕作

## 一、神道考古学の四段階

大場磐雄の学問をもっとも特徴付ける「神道考古学」は、弟子の佐野大和によって「考古・民俗・文献三位一体の神道研究」<sup>(1)</sup>あるいは「いう所の「古代学」であり、「新国学」でもあった」と評されている（佐野一九七六、三〇八頁）。民俗資料・文献資料に依拠する部分が多いこと、時期・地域を特定しない日本古来の信仰の探求といった点で師である折口信夫の「古代」と対象が類似することなどから、「神道考古学」の基本的な性格を良く示しているものとして、しばしばこの言葉を引用してきた。しかしながら、大場の神道考古学的な研究を跡付けてみると、必ずしも上述の性格ばかりではないことは言うまでもない。そこで、筆者は、神道考古学の形成・展開過程を対象や方法論の面から次の四段階に区分した（中村二〇〇八b）<sup>(2)</sup>。

第一段階…石器時代研究の一環としての宗教思想研究（土偶論・石棒論など）<sup>(3)</sup>や、民俗学的な研究の段階。

第二段階…昭和二年の「神社と考古学」の発表や三倉山との出会い以降、神社局に移り職務として神社調査を行う傍ら、精力的な祭祀遺跡の調査をはじめた段階。

第三段階…昭和一〇年の「神道考古学の提唱と其の組織」から、学位論文「祭祀遺蹟の研究」を経て、昭和三九年の「神道考古学の体系」に至る段階。特徴的な自然景観を対象とする祭祀遺蹟の文献・民俗事例・考古資料三種の資料からの考察を研究の中心としたもので、『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』に主要な成果が収録された。

第四段階…第三段階後半から最晩年の『考古学上から見た古氏族の研究』に至る時期で、祭祀遺跡と古氏族の關係などの祭祀遺蹟の歴史的脈絡の検討や歴史時代の祭祀、信仰対象の不明瞭な集落内祭祀など、第三段階とは異なつた資料の検討を行った段階。

このうち、佐野が上記のように評価したのは第三段階の諸業績を対象としている。第三段階は時間的にも長く、『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』に収録された諸論文の多くが、対象となる考古資料を列挙した上で民俗資料・文献資料からその意味を解釈するという論法をとる。逆に言えば現在の神社や民俗に見られる信仰が古墳時代まで遡りうることを考古資料から証明するという方法論である（中村二〇〇九）。

ただし、第四段階の特徴とした具体的な時間・空間・集団を措定する視点は昭和一二年の「考古学上より見た氏族と神社」の議論（後述）や、昭和一三年の「南豆洗田の祭祀遺跡」（大場ほか一九三八）での「賀茂氏」の東方移住の問題などに見られるように、第三段階とした時期の初期から認められる。

では、これら第三段階的視点と第四段階的視点は、いかなる背景のもとに生じたのであろうか。上述したように前

者については折口信夫の影響の下にあることは明らかである。しかし、具体的な影響関係については土偶の解釈をめぐる議論（深澤二〇〇五）<sup>4</sup>を除いては必ずしも明らかではない。また、後者についても論じられたことはないが、晩年の「古氏族論」の源流が那辺にあるのかは重要な課題となるものと思われる。本稿では、具体例として子持勾玉をめぐる著作を素材として、若干の考察を行いたい。

## 二、大場磐雄の子持勾玉性格論

### （一）子持勾玉の性格をめぐる先行研究

子持勾玉は「大型の勾玉の表面に勾玉の小型省略形すなわち子をつくりだしたものであり、古墳時代の五世紀中ごろから七世紀に用いられた滑石製品である（楢山二〇〇二）」。近年の集成では韓国の七点を含む四四八点が確認されている（國學院大學日本文化研究所二〇〇二）。その異様な形状から近世より注目を浴びてきたが、用途・性格については用途を示す埴輪や、明瞭な出土状況という同時代資料が存在しないため、類似する遺物や古典の記載、民俗事例などをもとに解釈されるのみであり、現在もなお明瞭とは言いがたい。従って、その著述内容を検討することにより、著者の学問的背景・方法論的特徴、視点などを検討する好資料となるのである。

近世においては、神武紀の「頭椎」に比定するなど、形状を根拠に劍の柄頭とする説が多かった（谷川一七七四、木内一八〇一）。これに対し、明治期になって祭祀遺物説を唱えたのは大野雲外（一九〇六）である。大野は、琉球のノロが使用した大きな勾玉に注目し、「或は上代神社等に於ても亦儀式的に使用されたことがないとも限るまい」と述べており、祭祀遺物説の最初の根拠として沖繩の民俗事例があったことが注目される。<sup>5</sup>高橋健自（一九二八）は櫛

## 別表 大場磐雄略年譜・主要著作

明治 32	1899	東京市生まれ	第一段階
大正 6	1917	武蔵野会入会（鳥居龍蔵・山内清男と出会う）	
大正 7	1918	國學院大学入学、「抉様の石製品に就いて」	
大正 8	1919	郷土研究会幹事（この年、折口信夫講師着任）。「武蔵の巨人民潭」	
大正 11	1922	國學院大學卒業・神奈川県立第二横浜中学校着任。「石器時代宗教思想の一端」	
大正 14	1925	内務省神社局考証課嘱託となる（課長宮地直一）。	
大正 15	1926	『民俗叢話』『神社と考古学』、「土偶に関する二、三の考察」	
昭和 2	1927	『石器時代の住居跡』、「南豆に於ける特殊遺跡の研究」	
昭和 3	1928	大場姓へ改姓	
昭和 5	1930	『石上神宮宝物誌』「原始神道の考古学的考察」	
昭和 6	1931	「関東における奥羽薄式土器」「上代人の愛玉思想に就いて」	
昭和 9	1931	『日本考古学概説』『羽黒山古鏡図譜』「本邦上代の洞窟遺跡」	
昭和 10	1935	「神道考古学の提唱と其の組織」、國學院大學学部講師	
昭和 12	1937	「子持勾玉私考」「上代馬形遺物に就いて」「日本上代の巨石崇拜」	
昭和 13	1938	「南豆洗田の祭祀遺蹟」「甲斐国分寺・伊豆国分寺・飛騨国分寺」	
昭和 14	1939	「上総菅生遺跡の一考察」「伊賀国南宮山麓の上代祭祀遺蹟」	
昭和 16	1942	『神宮大観』『古語拾遺の考古学的一考察』『玉依比売命神社の児玉石』	
昭和 18	1943	『日本古文化序説』、『神道考古学論攷』	
昭和 23	1948	学位取得（『祭祀遺蹟の研究』）。『古代農村の復原』『日本考古学新講』	第三段階
昭和 24	1949	國學院大學教授就任、『登呂』「信濃国安曇族の考古学的一考察」	
昭和 25	1950	古代学会副会長。「考古学上から見た我が上代の世界観念」	
昭和 26	1951	「相模国府の位置について」「相模国分寺の性格」	
昭和 27	1952	「東北地方の祭祀遺蹟」「万葉集に表れた祭祀」	
昭和 30	1955	『平出』『杉並区史』『下伊那の古墳時代文化』	
昭和 31	1956	『信濃史料 1（信濃考古綜覧）』『常陸鏡塚』	
昭和 32	1957	『上原』『伊東市史』	
昭和 34	1959	『松戸河原塚古墳』	
昭和 36	1961	『猿投神社誌』「春日大社の考古学的考察」「物部氏とその東方移住」	
昭和 37	1962	『武蔵伊興』『日本考古学辞典』	
昭和 38	1963	『加賀片山津玉造遺跡の研究』『姉崎山王山古墳』『神倉神社と天磐盾』	
昭和 39	1964	「神道考古学の体系」「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺蹟」	
昭和 40	1965	『東京都遺跡目録』『武蔵野市史』『方形周溝墓』	
昭和 41	1966	國學院大學に考古学専攻を設置。『信濃浅間古墳』『稲荷山経塚』	
昭和 42	1967	『まつり』「歴史時代における「塚」の考古学的考察」	
昭和 44	1969	『熱海市史』『神坂峠』	
昭和 45	1970	定年・大学院客員教授、日本考古学協会委員長。『祭祀遺蹟』「古東山道の考古学的考察」	
昭和 46	1971	『常陸大生古墳群』『柴田常恵集』、『新版考古学講座』刊行開始	
昭和 47	1972	『神道考古学講座』刊行開始	
昭和 48	1973	『宇津木遺跡とその周辺』「菅生発見の「やまとごと」」	
昭和 49	1974	『町田市史』「古氏族の移動と装飾古墳」	
昭和 50	1975	著作集刊行開始、逝去。『考古学上から見た古氏族の研究』	



第1図 伊勢神宮々域出土子持  
勾玉 (ob1066)

は出土遺跡を祭祀遺跡(三輪山など)、「弥生式土器」<sup>⑦</sup>を持った住居跡、性格不明の三種に区分している。また、後藤守一(一九三〇)は、奈良県山ノ神遺跡などでの石製模造品との共伴例から祭祀遺物としての性格のあったことを指摘している。

(二)「子持勾玉私考」(大場一九三七c)

昭和一二年に國學院大學上代文化研究会の『上代文化』に発表された論文である。はじめに「遺物補遺」として一六箇所の資料集成と、後述する伊勢神宮例を含む新資料の具体的な紹介を行う。次いで、「遺跡考證」として、旧国別の分布状況を示し、発見状況の偏りに留意しながらも、石材産地との関り、用途との関りの二つの可能性を示している。さらに出土状況を単独出土、土器石器を伴出、滑石製模造品と伴出、神社境内発見の四つに区分した上で、直良説に反し土器石器との有機的な関係を否定して、単独出土と同等と位置づけた上で、性格の判明する遺跡は、祭祀遺

形勾玉が古墳から出土するのに対し、子持勾玉が単独で出土するのは、それが奉幣報賽に供されたためとし、墳墓から出土する小形の銅矛・銅劍と単独で出土する大形品との関係の類似を述べる。<sup>⑥</sup>さらに、小形の勾玉が装身具であるのに対し、大形化した子持勾玉はむしろ宗教的意義をもったものと説き、さらに三輪山や日前神宮などの古社境内からの出土に注目している。一方、直良信夫(一九二九)は主体を勾玉とするよりも三日月形とし、形態の類似から、銅鐸の鈕を起源とし、同様の宗教的宝器とする説を提示した。なお、直良

物たる模造品の出土する遺跡および神社境内という点で祭祀関係遺跡のみと結論する。「遺物考證」では石材、孔、突起、刻文、大きさについて観察を加えている。突起・刻文については起源を動物形(鱗)に求めているものの、具体的な根拠は示されていない。「用法私案」では、単なる装飾品ではなく祭祀関係品とした上で、起源とは別に勾玉との性格の類似を指摘し、勾玉が装飾品化するのに対して呪的の意味合いが強まったものと解釈する。なお、勾玉の神秘的性質については、天照大神と素戔嗚尊の誓約などの記紀の記事、宗像神が玉を神体とするという筑前風土記逸文の記述、多量の玉類を所蔵する静岡県二宮神社、後述する玉依比売命神社の児玉石神事という文献・民俗事例を取り上げ、さらに「民俗学者の説くなる「タマ」は魂と通いて、生命の籠る神秘的物質なりとの考も宜なり、玉依姫の御名も亦ゆかし」と民俗学説も引いている。また、用法については勾玉を含む玉飾りを使用する琉球のノロの事例(島田一九二九)を参照している。

大場はこの論文と同時期に『皇国時報』に「神宮々域発見の子持勾玉と滑石製品」を寄せている(大場一九三七b)。これは昭和一二年六月に、日本橋白木屋で開催された伊勢参宮に関する展覧会に出展された際に調査した子持勾玉「第一図」と石製模造品を紹介したものである。調査の経緯、遺物の観察、発見地について述べた上で、以前から神宮宮域で石製模造品が出土していることを挙げ、最後にその意義として、古代における神宮への奉賛品の事例を増やしたことが、子持勾玉の用途の考察上の好例であることを指摘する。

### (三)「玉依比売命神社の児玉石」(大場一九四二)

昭和一七年二月、栗岩英治の慫慂によって現在の長野市松代周辺の積石塚群の踏査に訪れた大場は、「子持勾玉私考」で注目していた同地の式内社である玉依比売命神社「第二図」を訪れ、「児玉石」「第三図」の調査を行い『信濃』に



第2図 玉依比売命神社 (VI -40-10)



第3図 児玉石 (VI -40-10)



第4図 児玉石神事 (VI -40-10)



第5図 三ツ石 (ob1703)

報告を寄せた。大場は調査経緯、古記録による数量の変化、保管状況、玉類の分類を行った後、各類の玉について説明を加えている。考察は玉の問題と神社の問題の二つに分けて展開されている。同社では毎年正月七日に児玉石の数を数えて年の吉凶を占う児玉石神事が行われる「第四図」。この年の神事では七百六十九点の玉類が確認されたが、古記録によれば明暦年間の六〇余から順次増えており、文化一〇年の伴信友の『神名帳考証』(伴一九〇七)にも「子ヲ生ム」との観念が記されていることが紹介されている<sup>(8)</sup>。児玉石の中には九点の子持勾玉があり、うち三点が「三ツ石」<sup>(第五図)</sup>として最重要視されてきたことは、大場の考察でも真っ先に取り上げられているが、子持勾玉が本来的にこの「生石」観念の産物であったとの見解を控えめながら提示している。ついで、静岡県二宮神社(静岡県一九三〇)や奈良県石上神社(大場一九三〇)などの玉類を多く所蔵する神社、玉類を神宝とする神社に関する古記録や現存の

実例を列挙して、古代より玉に靈力が潜む觀念のあったことを説く。

続く玉依比売命神社の考察では、古典に見る「玉依比売命」の名を持つ複数の神々を検討し、またその名が巫女をあらわす普通名詞であるという柳田国男の「玉依姫考」(川村一九一七)を引いた上で、神武天皇の母の属する海人族と玉との関わりに注目する。さらに安曇郡の穂高神社、更級郡の水鉋斗売神社の存在や「海部郷」の地名の存在に注目し、全国的な積石塚古墳の分布と海部族の分布の一致を説いて信濃と海人族との関係を主張した。

#### (四) 戦後の子持勾玉性格論

昭和二二年に提出された大場の学位論文「祭祀遺蹟の研究」(大場一九七〇)は、大きく祭祀遺蹟の考察と祭祀遺物の考察からなるが、前者は後者より二倍の分量があり、自然物を対象とする祭祀遺蹟がその大半を占める。祭祀に関連する遺蹟として、銅銚・銅劍・銅鐸等の出土地、子持勾玉の出土地、土馬類の出土地が挙げられ、子持勾玉については八四箇所について、旧国別・遺蹟種類別という、子持勾玉私考と同様の区分を行い、同様の考察を行っている。

祭祀遺物の章では、土器・土製模造品・滑石製模造品・金属製品という素材別の項目と並び子持勾玉、土馬がそれぞれ独立した節として扱われている。形態の概況、使用時期の考察、用途・性格について述べているが、これまでの考察の域を出ていないものではなく、子持勾玉が児玉石神事を象徴するものと述べたのち、玉類に呪力のあったことを述べ、子持勾玉はその呪力的能力の優れたものであること、起源が動物にあり、次第に原形を失ったものの多産増福の信仰は継続されたと説く。

昭和三二年に國學院大學によって調査された東京都足立区の伊興遺跡からは、子持勾玉一点が表面採集されている。大場は報告書『武蔵伊興』の出土遺物の考察(大場一九六二)において、子持勾玉を再び取り上げ、一一八例を集

成した後、分類や変遷、起源について新たな検討を加えているが、性格については改めて触れられることは無く従来  
の説を踏襲している。<sup>9)</sup>

#### (五) 大場磐雄の子持勾玉性格論

以上、大場の子持勾玉論を概観してきた。資料集成や型式分類、起源、分布の問題については、戦後の『武蔵伊興』  
まで継続して検討が行われているのに対し、性格論については、「子持勾玉私考」と「玉依比売命神社の児玉石」でほ  
ぼ尽くされていることがわかる。子持勾玉を祭祀遺物とする根拠のうち、祭祀遺物である石製模造品との共伴は後藤  
守一、勾玉との類似や琉球のノロへの注目は大野雲外の所説を継承している。しかし、子持勾玉を「玉ニたま」の象  
徴であるとする説は大場独自のものである。むしろ、大場の子持勾玉性格論はすなわち、「玉」の性格論といっても過  
言ではない。

玉は三種の神器の一つとして注目されてきたものの、考古学的研究においては基本的性格を装身具に求め、その呪  
術的性格について言及されることは少なく(高橋一九二八)、大場の個性が光っている。なお、大場は既に昭和二年  
に宮地直一の代筆で執筆した『神社と考古学』(考古学講座)の中で、信仰遺物として玉を取り上げているが、具体的  
な考古遺物には触れられていなかった(宮地一九二七)<sup>10)</sup>。

さて、大場の子持勾玉論(「玉論」)は大きく二つの視点から成っている。まず、「子持勾玉私考」や「玉依比売命神  
社の児玉石」考察の前半で展開された、玉ニ魂論であり、特に後者文献で展開された生石あるいは生子石という玉  
が増殖するという觀念の存在を考察し、子持勾玉は特にその呪力が強調されたものとみなす議論である。玉の持つ靈  
力の普遍性を強調した視点と言えよう。もう一つは、「玉依比売命神社の児玉石」考察の後半の、玉依姫の神名に関わ

る伝承や、海人に関わる地名・神社の考察から、玉と海人族との結びつきを強調した議論である。これは上記と異なり、具体的な歴史事象に関わる視点である。

### 三、子持勾玉論の二つの背景

#### (一) 折口信夫の「たま」論

第一の視点が、本稿冒頭で示した折口信夫の「古代研究」と通じるものであり、折口の影響の下にあることは言うまでもないだろう。大場は谷川姓時代の「大正七（一九一八）年に國學院大學に入学し、同期の西角井正慶・藤野岩友、一年後輩の今泉忠義らとともに、翌八年に代理講師に着任した折口信夫のもとで、郷土研究会を再興させ、その幹事として活躍した（折口一九三〇、大場ほか一九四七）。内務省神社局考証課に勤務した後も、折口の慫慂により長野県新野の雪祭りを伝える伊豆神社の昇格問題に関して、折口の同行を得て出張調査を行っている（大場一九六三、小川二〇〇四）。また戦後の混乱期に学位取得を促して教授着任の道を開いたのは折口であり（大場一九七〇）、昭和二五年には折口を会長、西角井・大場を副会長として「古代学会」が設立されるなど（佐野一九七五）、師弟関係は生涯にわたって継続した。

折口が没して六年後の昭和三四年、大場は折口記念会で「折口先生と考古学」と題した講演を行っているが、このたびの國學院大學伝統文化リサーチセンターによる資料整理によって、この講演案が確認された。<sup>(1)</sup>

折口先生と考古学 一三四・九・七 折口記念會公開講座―

一、はしがき

思い出から、大正八年頃のこと、採集品えのヒント。土偶のこと、<sup>a</sup>上代文化研究会の公開講演で「劔と玉」と題して話されたこと、昭和二十五年古代学会設立のこと

二、先生と考古学

先生は考古学者でない、考古学を専攻されない、がそれを排斥されてはいなかった。むしろ反対に考古学に対する蔭からの応援又は暗示を附与された立場にあった。考古学者が物に立脚して尙か結論を導くもの一もの、真姿を説いたが<sup>一</sup>に対して、先生はゆたかな民俗学や国文学の知識から物の姿を明らかにせられたが、それが一致した場合が少くない、先生の論文中から数々の考古学に対する遺物の真の姿を把握したことも少ない

<sup>一</sup>神道は書紀古事記以前からあったのだから書かれたものばかりにたよるのは誤り

三、考古学上における先生の暗示

①埴輪にあらわれた遊部の実例

遊部の職業、垂仁天皇の裔 円目王 天鈿女命の子孫 鎮魂を行う職

東遊、神遊と同じ、鎮魂の舞踊った舞の種類

—鳥の遊、遊猟、蓼面の遊 貫頭衣、ヒレ、ハダカ  
 埴輪に見る 各種の姿態（遊部の姿）

② 劍と玉と鏡 二玉

<sup>b</sup> 玉は魂と同様 靈魂の象徴、各種の形態あり

マジックとして用いられた、御魂ふりの用具となつた、

<sup>c</sup> たまふゆ（内在魂の分割）天皇に魂を奉ること

劔は鎮魂の具として使用される、冬木のすゑふゆ（吉野國樺の歌）

鏡は外来魂の象徴（日の御子が母から受ける）

<sup>d</sup>（玉依比売命神社のこと 子持勾玉のこと 古墳に玉を捧げること）

四、むすび

文献学＋民俗学、＋考古学 これが古代学の理想であつて、折口先生の考古学に対する影響はそこにかける。京都の小林行雄のこと。先生の学問は意外な人の肥料となつてゐることを確信する

興味深い点は多々あるのだが、ここでは傍線を引いた部分に注目するにとどめたい。傍線部<sup>a</sup>の講演は、昭和七年二月一二日に上代文化研究会の公開講演会として行われたもので、その内容は同会の機関誌『上代文化』第七号に掲載された。<sup>12</sup>そこでは傍線部<sup>b</sup>で引用されているように「たま（靈魂）を具体的にしむばらゐせ玉をばたまと称」（六頁、傍線部原文）すこと、さらに傍線部<sup>c</sup>に該当する「たまふゆ」が「増殖の意味を持つ様になつた」（一三頁）こ

とが述べられており、大場の「児玉石神事は玉が子を生じて増加するという信仰から起こっており、これを象徴したものが子持勾玉」(一九七〇、一三〇頁)という主張に見事に一致する。傍線部dの「玉依比売命神社のこと 子持勾玉のこと」の部分はまさにこの一致を表明したものであったのだろう。「たま」論は鎮魂論と関わって、折口の学問の最も基礎的な部分にあたるが、大場の子持勾玉(玉)の性格に関する解釈は、これを全面的に用いたものであった。

## (二) 宮地直一の古氏族論

第二の視点は「玉」と海人族との結びつきという、歴史的視点である。冒頭で述べたとおり神道考古学の第四段階は、まさに古氏族と神社・祭祀遺跡との関係を追ったものだが、「玉依比売命神社の児玉石」の議論はその萌芽の一つである。古記録に載る氏族と神社を結びつける視点は当時の大場の上司であった神社局考証課長の宮地直一の影響によるものと思われる。大場は大正一四年から宮地が退職する昭和一三年まで宮地の下で神社考証にあたっているおり、大場が手がけた神社誌・神社宝物誌の殆どに宮地が序文を寄せている。また、赤城山の小沼の写真など大場と宮地が共有していた資料もあり(黒川二〇〇八)、両者にも緊密な関係のあったことが知られている。

宮地の年譜・業績を検討した遠藤潤(一九九六)によれば、宮地の卒業論文(「八幡宮の研究」)は、政治を中心とした事件的通史の中に歴史の変遷を位置づけようとする論述の方法をとっていること、こうした視点は以後著される概説書にも受け継がれていくことを指摘している。

宮地が明治四二年に皇典講究所の神職講習会で口述した内容を刊行した『神祇史』(宮地一九一〇)は、氏神信仰から説き起こされている。ここでは「一方から見れば氏神の盛衰によって、その氏神の勢力を卜知することも出来る」(九頁)として氏神と氏族との密接な関わりを説き、石上神宮と物部氏、鹿島神宮と中臣氏、忌部神社と忌部氏とい

った関係や、氏神の分祀現象が説明されている。その後の『神祇史綱要』（宮地一九一九）、『神道史』などの概説書でも、冒頭近くで神社と氏族との関わりを事例を挙げて紹介している。

昭和六年に刊行された『諏訪史第二卷 諏訪神社の研究』では諏訪大社の鎮座に関し、祭神建御名方神に関わる神話を検討した後、具体的に現在の諏訪の地に鎮座した背景を考察している。そこでは、諏訪神を祀る諏訪氏（神氏）を古墳の分布や地名の検討から上伊那を本拠地とする出雲系の氏族と考証する。あるいは諏訪神の后神である八坂刀売神について、安曇の穂高神社や更級の氷鉋斗売神社の周辺における海人系氏族の分布を述べ、龍神による湖水決壊伝承なども勘案し、安曇系の巫女思想の上に成立したことを説いている。ここでは玉依比売命神社も同様の性格を持つものとして紹介されている。

なお、宮地や大場の氏族論は、同じく内務省神社局考証課にいた大田亮の氏族研究に多くを負っている可能性が高い。例えば『諏訪史』とほぼ同時期に刊行された『神道講座』所収の「氏神の発達」（太田一九二九）においては、海洋的氏族の代表例として安曇氏を挙げ、その分布の全国の関連地名や神社名を集成している。この中には既に穂高神社、氷鉋斗売神社や海部郷などが挙げられている。宮地や大場の所説の基礎データはこれらに拠っている。

一方、こうした氏族や神社、地名に加えて、考古資料を検討材料に加えた点は、大場の独自の視点である。大場は「考古学上より見た神社と氏族」（大場一九三七a）において、島根県玉造湯神社・忌部玉作遺跡・徳蓮城古墳と玉作氏、奈良県鏡作坐天照御魂神社・同社蔵の二神二獸鏡と鏡作部、愛知県尾張戸神社・社殿下の古墳と尾張氏、静岡県敬満神社・牧野原御小家原古墳の精巧な杏葉と秦氏、群馬県土師郷の土師神社・土師器窯・古墳と土師氏の関わりを説いた。古記録にある氏族と神社・地名・考古資料を結びつける視点は、晩年の古氏族論と基本的に変わるところはない。大場の玉と海神族との関係の議論は、太田や宮地の研究の上に、玉や積石塚という考古資料を加えて成立した

のである。

戦後のことになるが、宮地は『穂高神社史』（宮地一九四九）の執筆に打ち込み、脱稿直後に彼の地で急逝する。この『穂高神社史』では穂高周辺への安曇氏の移住の年代や道筋を考証し、その中で九州から北陸を経て信濃に入るルートについて、海人の分布や銅矛・銅剣の分布を挙げて説明する「大場磐雄博士の意見」を紹介している。実は本書刊行と同時期に「信濃安曇族の考古学的一考察」を第三次『信濃』の創刊号に寄せているが、この文章の一部は『穂高神社史』の前述の部分とほぼ同文である。大場が稿を草し、宮地が加除筆、構成の入れ替えを行ったことが想定される。また、『穂高神社史』の北信地域の安曇族の分布を説明する段では、玉依比売命神社を紹介し、児玉石神事に触れた後、周辺の積石塚にも言及している。これも明らかに大場の所説を容れたものであり、師弟の関係をよく示している。

#### 四、おわりに——「古代学」としての考古学・「神道史」としての考古学——

子持勾玉性格論を素材として、大場磐雄の議論の背景について検討してきた。型式論や起源論、用途論に関しては先行研究の流れにあるものと捉えられる一方、玉の霊力、すなわち魂の増殖の象徴的存在であるとする議論や、玉と海人族を結び付けて歴史的な議論を展開する点などは独創的であった。本稿では、その背景として、前者については折口信夫、後者に関しては宮地直一という、大場の二人の師の方法論の影響の産物であることを論じた。折口の学説との関係は、講演案の検討から具体的に明らかにしえたものの、宮地の学説との関係については推定の域にとどまっている。しかし、玉の持つ霊力を古代一般の思考として総合的・抽象的に捉える議論と、具体的な神社や氏族の歴史

動向との関係の議論という方向性の大きく異なった視点を比較するとき、その背景としての折口信夫の「古代研究（古代学）」と宮地直一の「神祇史（神道史）」という二つの学問の影響が如実に現れていることは明白である。

冒頭の佐野大和の評にあるように「神道考古学」の主要部分は前者の方向性を強く受けた「古代学」としての考古学であったが、同時に「神道史」としての考古学もまた、当初から僅かながら認められ、晩年には大きく花開く。両者の性質はまさに表裏一体というべきだが、必ずしも車の両輪としてバランスよく論じられた訳ではない。共に「神道考古学」の基盤となった方法論であったが、両者の有機的な融合は容易なものではなかったようである。

本稿は文部科学省オーブンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業の研究成果の一部であり、平成二十一年七月四日に行われたシンポジウム「近代人文学の形成と皇典講究所・國學院の学問」での口頭発表を基礎としている。本稿の執筆にあたり多くの方々にご助言を得たが、特に折口信夫に関わる部分は深澤太郎氏の研究に追うところが大きいことを明記しておく。なお、本稿で用いた写真のうち、obを付したものは國學院大學研究開発推進機構学術資料館所蔵の大場磐雄博士写真資料（國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト 二〇〇五・〇六）、VI-40-1を付したものは同資料館所蔵の大場磐雄博士資料（國學院大學伝統文化リサーチセンター二〇一〇）である。

## 註

- (1) 現在、伝統文化リサーチセンター資料館では常設展示として「國學院の神道研究」の枠内で大場の紹介を行っている。
- (2) 以下の四段階の説明には、今回加除筆を行った部分がある。
- (3) この時期の研究は、デュルクムなどの西欧の宗教学理論を石器時代の研究に援用する姿勢が強いものであり、国外との比較を殆ど行わなくなる第二段階以降とは対照的である（中村二〇〇八a）。
- (4) 貝塚などで土偶が破壊されて出土することに対し、折口が破壊されると靈力を失うために廃棄したとの解釈を提示したことを後に大場が紹介している（大場一九五六）。
- (5) 劍柄頭説から祭祀遺物説への変化には、近世には西日本で退化型の事例が多く知られていたものが、明治期になって勾玉に勾玉形を付す形状の事例が増加したという背景も指摘されている（篠原二〇〇二）。
- (6) 現在、細形銅劍・銅矛と広形・広形銅劍・銅矛との違いは年代差とされている。
- (7) 当時の「弥生式土器」には現在の土師器を含む。
- (8) この記述は「松代人何某氏語也トテ平田氏語レリ」というものである。既に「子持勾玉私考」でも多数の玉を所蔵する例として紹介されていたものの、当時は子持勾玉の有無が明瞭でなかったため重視されていないが、本稿以降の大場の議論においては大きな鍵となる。近世の考証家による考古資料の解釈の多くは大場に引き継がれないことと比較すると注目すべき点である。
- (9) 「玉依比売命神社の児玉石について考察を施した時、本品の意義がある程度迄判明したと考えていた」（大場一九六二、八八頁）。なお、ここでは子持勾玉の起源を玉杖に求めている。
- (10) その後、後藤守一（一九四〇）は「古墳副葬の玉の用途に就いて」で子持勾玉には触れていないものの、勾玉の多数出土例に関し、長野県玉依比売命神社、新潟県斐太神社・奈良県石上神宮の例、ならびに山ノ神遺跡などの祭祀遺跡での出

土例を挙げて、奉斎品としての性格を持つものがあることを指摘している。

- (11) 大場は昭和二四年から講演案・案内状・謝礼袋などを年毎に綴っており、目次をつけて整理していた。その全容は再来年度刊行予定の目録で公開されるが、資料の重要性にかんがみ、本資料は平成二十一年六月一日〜七月二五日に開催された伝統文化リサーチセンター企画展および、本稿の基礎となったシンポジウム発表で翻刻付きで紹介した。翻刻は杉山章子・深澤太郎・杉山林継の各氏の協力を得た。

- (12) 折口年譜および全集収録作品の題目は「剣と玉」となっている。

- (13) 社名の項で、豊玉彦の子である布留多摩命を挙げ、鎮魂に際して魂の振起を促す作用を挙げて安曇族の特質の一端を考証しているが、この鎮魂論は折口の所説である。

## 引用文献

- 遠藤 潤 一九九六 「宮地直一」『東京帝国大学神道研究室旧蔵書目録および解説』東京堂出版 九八―一〇九頁
- 太田 亮 一九二九 「氏神の発達」『神道講座』第二冊、神道攷究会
- 大野雲外 一九〇六 「子持勾玉」『東京人類学会雑誌』第二一巻第二四三号、三六五―三六七頁
- 大場磐雄 一九三〇 『石上神宮宝物誌』大岡山書店
- 大場磐雄 一九三七 a 「考古学上より見た神社と氏族」『皇国時報』第六三八号 四―五頁、第六三九号、八一―九頁
- 大場磐雄 一九三七 b 「神宮々域発見の子持勾玉と滑石製品」『皇国時報』第六四九号、八一―九頁
- 大場磐雄 一九三七 c 「子持勾玉私考」『上代文化』第一五号、上代文化研究会、五一―五頁
- 大場磐雄・佐藤民雄・江藤千万樹 一九三八 「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』第三八卷第三号、一七六―二二頁

- 大場磐雄 一九四二 「玉依比売命神社の児玉石」『信濃(第二次)』第五号 一一一五頁、第六号 一一一三頁
- 大場磐雄 一九四三 『神道考古学論攻』葦牙書房
- 大場磐雄 一九四九 「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃(第三次)』第一卷第一号、一一七頁
- 大場磐雄 一九五六 「常世にいます先生へ」『折口信夫全集月報』一七、三二五頁、中央公論社
- 大場磐雄 一九六二 「祭祀遺跡の考察 子持勾玉」『武蔵伊興』国学院大学考古学研究报告第二册、綜芸社、八七―一〇六頁
- 大場磐雄 一九六三 「栗石雑筆抄―新野行―」『信濃』第一五卷第二号、六二―六三頁
- 大場磐雄 一九七〇 「祭祀遺蹟の研究」『祭祀遺蹟―神道考古学の基礎的研究―』角川書店
- 大場磐雄 一九七五 『大場磐雄著作集』第六卷、雄山閣出版
- 大場磐雄・今泉忠義・西角井正慶 一九四七 「國學院大學郷土研究会略史」『民間伝承』一一卷一〇・一一号、折口信夫博士  
還暦記念特輯、民間伝承の会一七―二二頁
- 小川直之 二〇〇四 「折口信夫の新野調査と写真」『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯、五九―一〇五頁
- 折口信夫 一九三〇 「追ひがき」『古代研究』民俗学編二、大岡山書店
- 折口信夫 一九三二 「剣と玉」『上代文化』第七号、國學院大學上代文化研究会、五―一五頁
- 川村杏樹(柳田國男) 一九一七 「玉依姫考」『郷土研究』第四卷第一二号、一―二九頁
- 木内石亭 一八〇一 「石劔頭」『雲根志 三編卷之五』(九州大学デジタルライブラリー <http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/unkonsi/unkonsi.htm> 所収)
- 黒川寧子 二〇〇八 「宮地直一旧蔵ガラス乾板の概要―整理と数量的検討を中心に―」『國學院大學研究開発推進機構プロジェクト研究報告 画像資料と人文科学研究』第五集、五―二二頁
- 國學院大學日本文化研究所 二〇〇二 『子持勾玉集成』
- 國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト

- 二〇〇五・二〇〇六 『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ・Ⅱ』 國學院大學日本文化研究所  
 國學院大學伝統文化リサーチセンター 二〇一〇 『大場磐雄博士資料目録Ⅱ』
- 後藤守一 一九三〇 「石製品」『考古学講座』 雄山閣
- 後藤守一 一九四〇 「古墳副葬の玉の用途に就いて」『考古学雑誌』 第三〇卷第七号
- 佐野大和 一九七五 「日本古代学会のころー楽石大場磐雄先生略年譜補遺ー」『信濃』 第二七卷第一〇号、六一―六四頁
- 佐野大和 一九七六 「解説」『大場磐雄著作集』 第五卷、雄山閣出版
- 静岡県 一九三〇 「第二編（下）第二章第三節四 新居町二宮神社の玉類」『静岡県史』 第一卷、四二九―四三三頁
- 篠原祐一 二〇〇二 「子持勾玉小考」『子持勾玉資料集成』 付録 國學院大學日本文化研究所
- 島田貞彦 一九二九 「琉球勾玉考」『歴史と地理』 第三一巻第一号、三〇―四三頁
- 相山林繼 二〇〇二 「子持勾玉」『日本考古学事典』 三省堂、三〇四頁
- 高橋健自 一九二八 「勾玉と鈴とに就いて」『考古学雑誌』 第一八卷第七号、一一―二二頁
- 谷川士清 一七七四 「附石劔頭考」『勾玉考』（斎藤忠編一九七九『日本考古学史資料集成』 吉川弘文館 所収）
- 直良信夫 一九二九 「子持勾玉の研究」『史学』 第八卷第三号、一三七―一六三頁
- 中村耕作 二〇〇八 a 「大場磐雄の縄文時代精神文化研究―「石器時代宗教思想」研究から「縄文人の信仰儀礼」研究へ―」『祭祀考古学』 第七号、祭祀考古学会
- 中村耕作 二〇〇八 b 「神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡―大場磐雄の伊豆調査―」『平成二〇年度フォーラム 伊豆の神  
 仏と國學院の考古学 発表資料集』 七一―〇頁、國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ
- 中村耕作 二〇〇九 「大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』  
 第一号 三五九―三七六頁

- 伴 信友 一九〇七 「神名帳考証」『伴信友全集』第一卷、国書刊行会
- 深澤太郎 二〇〇五 「折口信夫と大場磐雄」『若木考古』第九六号、國學院大學考古学会、四一―六頁
- 宮地直一 一九一〇 『神祇史』皇典講究所國學院大學出版部
- 宮地直一 一九一九 『神祇史綱要』明治書院
- 宮地直一 (谷川磐雄代筆) 一九二九 「神社と考古学」『考古学講座』雄山閣
- 宮地直一 一九三一 『諏訪史 第二卷 諏訪神社の研究(前篇)』信濃教育会諏訪部会
- 宮地直一 一九四九 『穂高神社史』穂高神社社務所
- 宮地直一 一九五八 『神道史』上卷(遺稿集第四卷)理想社